

第7回口語詩句賞
選考結果

■授賞対象者

大賞（賞金100万円）	常田 瑛子
奨励賞（賞金各10万円）	牛田 悠貴
	川上 真央
	田中 まい（筆名 石村 まい）
	和田 実希（筆名 塩本抄）

■選考方法

第7回口語詩句賞実施要領に基づき、口語詩句投稿サイト 72h (www.kougoshiku-toukou.com)の投稿者に対して、下記の方法で選考を行った。

一次選考 今回投稿期間中の投稿者のうち、投稿20作以上で選考対象となる者から、選考委員各自が大賞候補者1名（選評および参考作品20作）、奨励賞候補者2名（参考作品各10作）を選出した。

二次選考 一次選考の結果をもとに、選考委員全員参加の選考会における議論を経て、大賞候補者のうち1名を大賞、その他を奨励賞の授賞対象者とした。

- * 投稿期間 2025年2月1日～2026年1月31日
- * 投稿者総数 758名（12,434作品）
- * 選考対象者数 210名（9,108作品）

■選考委員

暮田真名（川柳人）、小島なお（歌人）、杉本真維子（詩人）、高橋修宏（俳人・詩人）、立花 開（歌人）、西躰かずよし（俳人）、林 桂（俳人）、龍 秀美（詩人）

※龍秀美氏は二次選考欠席

■一次選考結果

一次選考として、各選考委員が選考対象者210名から、大賞候補1名（選評および参考作品20作）と奨励賞候補2名（参考作品各10作）を選出。これをもとに二次選考である選考会で議論をし、各賞を決定した。選考会の議論は文章化し、佐々木泰樹育英会ホームページで、2026年6月公開予定。

筆名	期間中作品数と内訳 (詩・俳句・川柳・ 短歌・アフォリズム)	評価 (大賞候補◎ 奨励賞候補○)								集計	
		暮田	小島	杉本	高橋	立花	西躰	林	龍	大賞候補	奨励賞候補
常田 瑛子 (山口県、39歳)	72 (0・0・0・72・0)			◎	◎		◎		◎	4	0
塩本抄 (石川県、38)	61 (0・0・2・59・0)					◎				1	0
牛田 悠貴 (東京都、28)	72 (1・0・68・3・0)	◎								1	0
石村 まい (兵庫県、26)	72 (1・3・3・65・0)		◎	○	○			○		1	3
川上 真央 (東京都、18)	67 (0・6・0・61・0)							◎		1	0
ムクロジ (群馬県、18)	61 (0・48・1・10・2)					○		○	○	0	3
檜野 美果子 (宮城県、37)	67 (1・66・0・0・0)	○								0	1
奥井 健太 (滋賀県、23)	57 (0・56・0・1・0)		○							0	1
高田皓輔 (千葉県、21)	51 (0・16・9・26・0)			○						0	1
大西 美優 (広島県、24)	72 (0・72・0・0・0)						○			0	1
互井宇宙論 (埼玉県、19)	70 (0・16・35・19・0)	○								0	1
快名 (千葉県、22)	70 (0・0・6・64・0)		○							0	1
鶯浦 るか (富山県、64)	72 (1・69・0・2・0)				○					0	1
にわ (栃木県、29)	72 (0・0・11・61・0)					○			○	0	2
小川 未夜子 (石川県、30)	48 (1・0・8・39・0)						○			0	1

第七回口語詩句賞

一次選考・大賞候補 ※参考作品は各選者が選出

暮田真名

「大賞候補」牛田 悠貴

*参考作品

- 1 墓の方からおことわりだよ
- 2 お体はもう轟きますか
- 3 飼い主をダビングしては配る犬
- 4 働く方を改革してしまつたわ
- 5 ドラムセットのいちいんでしたか
- 6 二人一組で事柄になりなさい
- 7 指紋増してきてこの家じゃ狭いよ
- 8 おにぎり(筋金入り)
- 9 良い質問ですね身体は無いけれど
- 10 性根ポイしなさい
- 11 一人息子を半ダース抱いておる
- 12 視線連邦つくっちゃおっか
- 13 光る源氏を浴槽へ流し込む
- 14 半ドアですよ、その走馬灯。
- 15 話せば長くなる胴体部
- 16 父の背に組体操を縫いつける
- 17 あてどなく転生したお

- 18 数え歌らしい男になってくれ
- 19 筋肉に間借りしてまで居たいのか
- 20 俺らって良く言えば自転車二台

*選評

- ② お体はもう轟きますか
- ⑦ 指紋増してきてこの家じゃ狭いよ
- ⑮ 話せば長くなる胴体部

牛田悠貴の川柳を読むときに受ける印象は、ホラー映画、ゾンビ映画、スプラッタームービーを鑑賞するときに受ける印象に近い。ほんらい不可逆で、丁重に扱われるべきものである人体が、あたかもやり直しがきくかのように粗末に扱われているのだ。

②「お体」と氣遣われる身体が、しかし「轟く」という音響のみの存在であること。⑦家族が増えて家が手狭になる。人間を「指紋」で換算する奇妙さ。⑮「話せば長くなる」という定型句を「胴体部」につなげることで、ろくろ首のように伸びる胴体が現れる。

- ⑤ ドラムセットのいちいんでしたか
- ⑥ 二人一組で事柄になりなさい
- ⑧ おにぎり(筋金入り)
- ⑫ 視線連邦つくっちゃおっか
- ⑳ 俺らって良く言えば自転車二台

牛田作品の中で、人はモノのように、モノは人のように振る舞う。

⑤⑥⑳固有性を剥奪され、「ドラムセット」「事柄」「自転車」として扱われる人々。「二人一組でくになりなさい」は教員からの呼びかけを思わせる。「良く言えば」は卑屈さの現れだろうか。

⑧⑫反対に、命を持たないモノたちは妙に生き生きとしている。「筋子」ではなく「筋金入り」のおにぎりは、おにぎりであることに誇りを抱いていそうだ。⑫「連邦」という国家制度が、ここでは人々の「視線」によって作られる。「線」は結ぶものだから、「連」にスムーズに接続される。

- ① 墓の方からおことわりだよ
- ⑨ 良い質問ですな身体は無いけれど
- ⑩ 性根ポイしなさい
- ⑭ 半ドアですよ、その走馬灯。
- ⑰ あてどなく転生したお

①⑨⑰死者ですら死に続けることを許されない。「良い質問ですな」は池上彰からの引用だろう。身体がなくなるとも、先生の話を聞いて質問しなければならぬのだ。

⑩「性根が腐っている」という言い回しがあるが、腐っているならば捨てなければならぬ、という徹底した姿勢。

⑭車の「半ドア」は、非常時の事故防止のためにあるらしい。死ぬときに見る走馬灯にすら、安全装置がついている。

③ 飼い主をダビングしては配る犬

④ 働く方を改革してしまったわ

人はモノのように、モノは人のように、を突き詰めていくと起こることは、主客の転倒である。③「犬をダビングしては配る飼い主」であれば珍しくもなんともないが、反転するだけでこんなにも恐ろしい。④「はたらきかた」を「はたらくかた」と一文字変えるだけで、労働者への配慮である「働き方改革」が、さらに企業にいいように変更されてしまう。

⑪ 一人息子を半ダース抱いておる

⑬ 光る源氏を浴槽へ流し込む

⑯ 父の背に組体操を縫いつける

⑰ 数え歌らしい男になつてくれ

⑲ 筋肉に間借りしてまで居たいのか

ここまで確認してきた牛田作品の特徴は、「男性性」に對峙するとき、ひととき効果を放つ。家父長制において女性を都合良く扱いながらも、社会のなかでは駒のように使い捨てにされる男性という存在の両義性に迫ろうとしているように思える。

牛田の使用する「定型句の引用」や「語順の入れ換え」といった手法は、川柳形式の中で蓄積されてきたものである。詩型が積み重ねてきた表現と、個人の問題意識が合致するとき、作品は強い批評性を持つ。わたしが牛田を推薦する理由である。

小島なお

「大賞候補」石村 まい

*参考作品

一 しずかに

夢の蛇口をこわしたら
少年たちの砲弾がくる

二 秋と数字の媒体として立ちつくす

古本市に消えそいなひと

三 傘のない来世ひろーい

きんぴかの

鯛の群れにさらわれにゆく

四 リゾットは夢のしろさに

ふくらんで

秋きららかに眼を耳をゆく

51 あこがれは

へびつかい座の手に落ちて

ときおり戦わせるカトラリー

くだものを舌で潰してまじないを

あなたはわたしだけの無人島

かるがると

運び込まれる月や椅子

そういう失いかたを

何度も

生返事にあふれる日々の

だし巻きの

余生のような黄色がきれい

生まれた日のあなたに

金糸をめぐらせて

世界はすこし霞むのでした

蝋燭と変わらないのに

間違える

あなたのえくぼに触れようとして

空耳のまま

暮らしてもいいですか

餃子の並ぶスターバックス

白ぶどうの部屋が一室あいている

岬のように夜をねむれば

どこまでも定期的のような先輩を

しずかに照らす夜の自販機

14 あなたから葉をもらう

白昼の

ヘリコプターがあんなに遠い

15 ことごとく雲逃げてゆき

晴天は

文字を抜かれた遺書に似ていた

16 シャチハタで

ゆるしてくる建物に

まじめな花を借りにゆくよ

17 たよりなく伸びてゆく蔓

ふたりとも

手紙を書いたことがないから

18 あたらしいことは

いつでもこわいから

これも

くさかんむりのかみなり

19 ゆびをみるだけで

なみだがでてくるの

ナンをちぎれるゆびであるのに

20 飛ぶときに

耳のうしろを鳴る風よ

町いちめんに咲いている何か

*選評

石村まいさんの作品でまず目を引くのは、

対象のなかに心理を見いだす際の比喩の取

り扱いの清新さと、その裏側の慎重さだと思ふ。

かるがると／運び込まれる月や椅子／
そういう失いかたを／何度も

生返事にあふれる日々の／だし巻きの

／余生のような黄色がきれい

一首目では、廃品回収トラックに荷物が
積み込まれる場面を想像した。思い入れの
あつた身めぐりの人やもの。しかし使わな
くなつてしまえば、あつけなく廃品として
軽々と運び去られる。「そういう失いかた」
には、失った事実よりも、どのように自分

がそれらを手放したかという過程に心が寄
せられている。二首目、現役寿命が延びた
現代では死語になりつつある「余生」の言
葉。けれど、つねにデバイスからもたらさ
れる享樂に浸り相手への返事をおざなりに
している私たちの生身はどこか余生に接近
している皮肉にも似た危うさがある。ゆる
く、ほどけてゆく黄色がやさしく楽なほう
へ甘やかに誘うよう。

生まれた日のあなたに／金糸をめぐら
せて／世界はすこし霞むのでした

空耳のまま／暮らしてもいいですか／
餃子の並ぶスターバックス

シャチハタで／ゆるしてくる建物に
／まじめな花を借りにゆくよ

こうした作品には作者にとつての世界像
の一端が表れていると感ずる。「あなた」

という特別なひとにまるで金糸を巻き付け
るように装飾して祝福する。けれど、誰か
を特別と思うほどに金糸のかがやきは眩み、
その心の狭窄によって正常な視界は霞んで
しまう。洗練されたスターバックスの世界
ではおそらく一度たりとも発せられないだ
ろう「餃子」の語。世界の言葉や音は、私
の耳を通過することで私の世界へ自動的に
変換される。聞くはずのない「餃子」の語
が本当は何だったのか、確かめられないま
まに私たちは個々の世界を信じて生きてゆ
くしかないのだろう。「シャチハタでゆる
してくる」場面は、この世のあらゆるシ
ーンに存在する。契約書面、賃貸規約、顛
末書など。100均でも売っている簡易な
シャチハタひとつを私そのものとして携え
て、建物を渡りあるく社会へのシニカルで
ありながら、子どものようなまなざしに共
感した。

たよりなく伸びてゆく蔓／ふたりとも
／手紙を書いたことがないから

手紙を書くという行為はもはや日常では
珍しく、簡潔でスピーディーなツールに置
き換わった。便箋の白紙に自分の心を言葉
にして書き記す。その過程の困難さについ
て。書き言葉ではない、もっと軽くて、曖
昧で、婉曲で、リアルタイムで相手と気分
の感触を確かめ合うコミュニケーションは、

すぎる所を探して伸びる蔓のようなものだという。

また語彙と韻律のバリエーションについても注目した。「きんぴかの鯛の群れ」「定規のような先輩」など枠組みに囚われない語の選択と、初句切れ、二句切れ、三句切れ、区切れなし、句跨りなど自在な韻律感も魅力。

杉本真維子

「大賞候補」常田 瑛子

*参考作品

- 1 蟻が列を乱すようなたてがみを
持つ向日葵は無害な獣
- 2 除け者にされた獣の毛が詰まり
鍵が奥まで入らない星
- 3 水を飲む牡鹿のように文字を産む
万年筆は秋の静謐
- 4 湖をいちまいの氷で閉じて
冬は仏頂面の曾祖父
- 5 傘立ては雨の靴下
居ない人の声を
思い出すところに履く

6 空っぽの花器を飾った窓際に
薄いキリンのような陽が射す

7 真夜中を振り払おうと

冷蔵庫を開けて月の光をめくる

8 「右へ做え」の日々のなか

9 透明なコップは雨を溜めても裸

さみしさと呼ばれるものの輪郭よ

空を鳥から奪うのは雨

10 炭酸のように予感が吹きこぼれ

あさつての夕焼けを組み敷く

11 真っ白な平均台を踏み外し

少し遠くに七月が咲く

12 文脈は線路を渡り花びらの

ような歯型がうつすら残る

13 仇になる優しさを受け逆光の

なかのミモザへ目を逸らす午後

14 前世から予約していた夕焼けを

美術室まで受け取りに行く

15 空っぽを振りほどいたら夕焼けの

栓を抜かれてかえりたくなる

16 目薬の成分表をくださいな

〈ふりそびれた雨〉と書き足すの

17 夏の屋上の正午は白蛇が

横切るような光の破裂

18 海を容易く脱ぎ捨てるトビウオの
胸びれは光で濡れている

19 〈ほんとう〉にたどり着けずに

試着室の鏡に雨が匂う土曜

20 ブランコの鎖が揺れて

美しい着地を風は五月に決める

*選評

昨年引き続き、常田瑛子さんの作品を一年間読み、表現の幅のひろがりを感じた。どの作品も生死に触れる切っ先をもち、軽く流すようには読ませない。読ませないぞ、という気迫がある。その点は昨年から一貫している。

昨年少々懸念したのは、倫理と美のバランスにおいて、美のほうが若干勝って「見える」ことの危うさだった。しかし、そこがよい意味で均され、融合され、作品がより豊かなものになった。また、これだけまとまった数の作品を読むと、ああこれは表現のバリエーションの一つなのだ、という印象にもなってきた。かなり個人的な解釈かもしれないが、作者と読者の関係はプライベートなものだと思っっている。このような受け止め方もよいのではないかと思っただ。つまり、ひとりの読者として説得されたということだ。

以下、印象的な作品についてコメントしておきたい。

「文脈は線路を渡り花びらのような歯型がうつすら残る」
「文脈」とは何かという難しい問題が組上にあげられ、それに対し、詩歌でしか応答できないやり方で応答されている。

「目薬の成分表をくださいな
〈ふりそびれた雨〉と書き足すの」

「くださいな」というのんきな言いっぷりが面白い。前年にはない遊びの部分が微妙に見られる。緊張とリラクセスの糸を巧みに織り交ぜ、独自の世界を編んでいる。

「〈ふりそびれた雨〉」が目薬にはいつている、とは、なんとという鮮やかなイメージだろう。

「前世から予約していた夕焼けを
美術室まで受け取りに行く」

予約という言葉から、美容院…をなんとなく連想したら、「美術室」ときた。紋切り型のイメージをさりげなく裏切っているところがよい。

「炭酸のように予感が吹きこぼれ
あさつての夕焼けを組み敷く」

「組み敷く」という言葉選びの厳密さ、精確さがよい。信頼できる、と思える。

「除け者にされた獣の毛が詰まり

鍵が奥まで入らない星」
魅力ある、印象深い作品。言葉の凝集力と内容（「獣の毛が詰まり」等）が一致している。

「水を飲む牡鹿のように文字を産む
万年筆は秋の静謐」

こちらも言葉と内容が一致している。つまり、作品という調和化において卓抜している。

「点滴が海に溢れて
一人乗り用の観覧車で眠ってる」

たとえば、倫理より美のほうが若干勝っている、とかんじたのはこのような作品だ。ただ、完成度は高いと思うし、わるいというわけではない。

以上

高橋修宏

「大賞候補」常田 瑛子

*参考作品

1 「除け者にされた獣の毛が詰まり

鍵が奥まで入らない星

2 はつなつの光を畳むように折る

紙飛行機は鳥のレプリカ

3 水を飲む牡鹿のように文字を産む

万年筆は秋の静謐

4 永遠を見守りたいと

星が托卵する場所は

スケートリンク

5 〈ほろほろ〉と

〈Hold on〉を聞き違え

テッポウユリは斬首の角度

6 十月の森に入ればわたしだけ

映っていない静かな鏡

7 まなうらの夜が崩れて

事故現場に散らばる

ガラスのような雪

8 空だけが残されていて

抜け殻の割れ目は小さな光の滝

9 夏の屋上の正午は白蛇が

横切るような光の破裂

10 通過電車で眠る誰かのために

初夏、美しい駒になりたい

11 「右へ倣え」の日々のなか

透明なコップは雨を溜めても裸

言葉狩りされたのち裸足で渡る

対岸に紫陽花の待つ橋

- 13 はみ出した初夏の光が餌を喰む
草食獣の首筋を這う
- 14 喪主になる訓練をしているような
夕暮れの校庭の棒立ち
- 15 性別の泉はふたつきりでなく
蝶が綿毛の影を追い越す
- 16 仰向けで海の起源を想うとき
眼裏で揺れている吊り革
- 17 目薬の成分表をくださいな
〈ふりそびれた雨〉と書き足すの
- 18 どの嵐の中も妙に明るくて
シンの銀は夏の仮縫い
- 19 キリンでも飼うつもりなの三月を
こんな明るい吹き抜けにして
- 20 春風のアンダースロー受け止めて
生まれる前の草原にいる

*選評

今度の賞の選出は、月次における佳作数を踏まえながら、もう一度作品を読みなおすことからスタートしました。その結果、大賞に常田瑛子さん、奨励賞に鷺浦るかさん、石村まいさんを推すことにします。

常田さんの作品は、若干の例外はあるものの、そのほとんどが二行による表記。明らかに、短歌体の基本を踏まえたものと言えるでしょう。そのため、本サイトでは視

覚的な派出さやキャッチーな印象はありませんが、言葉の意味や音、また質感を活かした修辭、そこから立ち上がる審美的とも言える「光」のイメージには目を見張るものがありました。

・空だけが残されていて／抜け殻の割れ目は小さな光の滝

・はつなつの光を畳むように折る／紙飛行機は鳥のレプリカ

また、昨年の選考会でも議論となった社会性、批評性に関しても、自らの作において独自なかたちで昇華し、今年度の作品として提示していることにも注目しました。

・「右へ做え」の日々のなか／透明なコップは雨を溜めても裸

・除け者にされた獣の毛が詰まり／鍵が奥まで入らない星

いずれの作も批評的なモチーフが具体的に提示されながら、安直な答えを求めるところなく、「裸」や「星」という単語が深読み誘うような気配をほらみ佇立しています。

一方、けつして多くはないものの、口語ならではの質感や文体を活かし、日常からの逸脱をはかるような軽やかな作も見逃すことはできません。ふと、作者の中にある茶目っ気、あるいはチャーミングな強かさ

にふれるような作品と言ってもよいでしょう。

・目薬の成分表をくださいな／〈ふりそびれた雨〉と書き足すの

・キリンでも飼うつもりなの三月を／こんな明るい吹き抜けにして

加えて、常田さんにおける「わたし」という主体の在りかたについても若干触れておきたいと思います。

・十月の森に入ればわたしだけ／映っていない静かな鏡

・通過電車で眠る誰かのために／初夏、美しい駒になりたい

一作目は、やや類想性を感じさせるものの、作者の「わたし」の特徴が露呈しているような作品です。どこか儂いもの、絶えず流動する中で、「わたし」という主体を捉えているのかもしれない。おそらく二作目の「美しい駒」への変身願望などを含め、常田さんは容易に和解しえない世界に対し、「わたし」という主体を開き、晒しながら、巧みな修辭を繰り出すことで詩作（歌作）しているのでしょう。そして何より、一冊の作品集（歌集）として読んでみたいと思わせる美質を内包させた作者です。なお、鷺浦さんの定型自体を内破するような俳句体の作品へんめ、んまと父はいっ

てた梅と馬》、また石村さんの豊かな幻想性を呼びこむ短歌体の作品へ月は檻／うまれなかったアルビノの／けものを一羽のこらず抱いて〜にも注目しました。

立花 開

「大賞候補」塩本抄

*参考作品

- 1 どの角度からも入ってくる雨が遊んでほしいルルかもしれない
- 2 焼きたてのバターロールを素手でいくときは温度を感じないのよ
- 3 もういいかいの
どうにか届く高さから
次々紙ふうせん落ちてくる
- 4 グリッターまみれの指で
来月のないカレンダー
捲りましょうね
- 5 靴下の穴から指を入れてみる
古い家族の感触になる

6 ゆっくりでいいから

巻き戻してほしい

プールの鴨を見ていた時間

窓硝子越しに漆器が喋りだす

行きには静かだったギャラリ

砂浜をアイスそんなに頬張って

ああほらコーン砕けてしまう

どこまでも伸びるチーズに

うれしくて

目が覚めたなら無臭のピッツア

もう桃はじゅうぶんです

と

泣ききみの
夢のなかでは薄いくちびる

サファイアの椅子よ

あの子の王国を

どうして片付けているのだろう

鮮やかに色は溢れて

あなたとの

ボルダリングの始まりは四時

選ぶ人

読み聞かす人

睡る人

みな襟足をそよがせながら

二枚取りの

肉を頬張る瞬間に

迷ったでしょう

そういうところ

かすがいにもうならなくて

いいからね

お魚焦がしちゃってごめんね

つっぱり棒いつしか撓み

きみたちを

抱き上げられる季節にも

風
前髪の生えぎわ搔くと

くしゃみ出るよ

もうちよつと右

もうちよつと夜

梅雨入りに

去ってしまったつばめから

詩の一節を預かっている

それまではずっと

エレベーターにいて

たまに世界が戯けてくれた

あー、こおり。

目を閉じてみて

牛乳のちよいうすいとこって

いいよね。

ね。

*選評

流れが速く物に溢れた現代において、どのように詩のヴェールをかけるか。新しいものが次々に生まれては消えていく中で、奇を衒うではなく、丁寧なスケッチすることとまた戻りつつあるのではないか、と塩本の作品を読んで感じた。描く対象が他者と同じでも、塩本は鉛筆の色を変えることができる。作品は色とりどりの個性を光らせつつも丁寧な描写に徹しており、作品群として見たとき印象に残るものが多かった。一冊の歌集として読んでみたい作者と、大賞に推した。

① グリッターまみれの指で／来月のないカレンダー／捲りましょうね

② 砂浜をアイスそんなに頬張って／あ
あほらコーン砕けてしまう

③ あー、こおり。／目を閉じてみて／
牛乳のちよいうすいとこって／いい
よね。／ね。

「物」に対する思い入れが強いタイプなのだろうか。しつかりとした手触りが一首ずつ伝わってくる。①「来月のないカレンダー」とは十二月のことだろう。グリッターとは瞼などに乗せるラメのようなメイク道具。どうせ捨てるから意味のない行為と汚れた指で構わず触れることに、生活で蓋をされた寂しさを感じる。②言われた対象は両手でコーンを持って食べているのだろう。下句すべてが台詞であり、海風に晒さ

れながらアイスを食べる人（おそらく子供）、コーンが崩れないように声をかける主体、互いの一生懸命さが可愛らしい。③「こおり」へのよろこびが伝わる。ちょっとニツチな部分を共感しあう。

④ もういいかいの／どうにか届く高さから／次々紙ふうせん落ちてくる

⑤ かすがいにもうならなくて／いいからね／お魚焦がしちゃってごめんね
⑥ どの角度からも入ってくる雨が／遊んでほしいルルかもしれず

④紙ふうせんを投げてくる「何か」の小ささ。「どうにか」に背伸びやジャンプをしてできる限り多くこちら側に投げ入れようとしてくる様子が伝わってくる。⑤私性の詩形である短歌だが、あまり感情を描かない作者。家庭がうまくいっていないようで、ふとしたときにやり切れなさが滲む。母になりたかったのに、なりきれなかった。魚を焦がしてしまうように。⑥佳作で評した作品。かつて飼っていたペットの「ルル」の魂を感じた。振り込んでくる雨や風、陽射しすべてにルルのかけらを感じるのだ。観念世界でも動作を段階的に入れるなど動きを出し、うまく読者にパスを渡してくれ

る。評は書ききれないが、他に印象に残った歌を挙げていく。

鮮やかに色は溢れて／あなたとの／ボル
ダリングの始まりは四時
靴下の穴から指を入れてみる／ 旧い家
族の感触になる

焼きたての／バターロールを素手でいく
ときは／温度を感じないのよ
どこまでも伸びるチーズに／うれしくて

／目が覚めたなら無臭のピッツァ
奨励賞には、桜庭紀子、ケムニマキコ
の二名も候補に入れていた。口語のみから選
出するのは、定義を考え出すと決めきれな
い思いもあつたが、完成度・定義ともに塩
本を推したい気持ちは変わらなかつた。

西躰かずよし

「大賞候補」常田 瑛子

*参考作品

1 履き潰すバレエシューズを

本物の光の繭として胸に抱く

2 夏の語彙みたいに波を脱ぎ捨てる

テトラポットは海の読点

3 まなうらの夜が崩れて

事故現場に散らばる

ガラスのような雪

- 4 点滴が海に溢れて
一人乗りの観覧車で眠ってる
〈ほんとう〉にたどり着けずに
5 試着室の鏡に雨が匂う土曜
トライアングルの
6 余韻にくすぐられ
春はやさしい積み木と思う
7 どの嵐の中も妙に明るくて
シンクの銀は夏の仮縫い
8 三日月に春の夜空は支えられ
椅子の形がくつきり見えた
大理石の床を星を剥ぐように
9 朝まで磨く死者たちの夢
10 キリンでも飼うつもりなの三月を
こんな明るい吹き抜けにして
11 春風のアンダースロー受け止めて
生まれる前の草原にいる
12 フラスコにふっと彼岸花を挿せば
理科室に咲く赤い幽霊
13 はつなつの光を畳むように折る
紙飛行機は鳥のレプリカ
14 水を飲む牡鹿のように文字を産む
万年筆は秋の静謐
15 一度では読めない名前
熱帯魚は夜の淵で油絵になる

- 16 空っぽの花器を飾った窓際に
薄いキリンのような陽が射す
17 真っ白な平均台を踏み外し
少し遠くに七月が咲く
18 喪主になる訓練をしているような
夕暮れの校庭の棒立ち
19 空の箬箱をしずしず持ち運ぶ
花びらよりも薄いからだで
20 〈ほろほろ〉と
〈Hold on〉を聞き違え
テップウユリは斬首の角度

*選評

常田は、生の意味を喪失した現在に、ざらざらとした生をもういちどとりもどそうとする。だからだろうか。作品は飛躍したイメージとぎりぎりの比喩に満たされる。それがことばの密度の高さへとつながり、ときに息苦しさすら覚える。たとえば「大いしい少女に似合う簪は／鎧の隙間に刺さる毒矢」のように。

それでも書き手は、死と隣りあわせの、ありのままの生を描こうとする。「〈ほろほろ〉と／〈Hold on〉を聞き違え／テップウユリは斬首の角度」や、「まなうらの夜が崩れて／事故現場に散らばる／ガラスのような雪」といった作品では、通常では意

識することのない死のイメージが鮮やかに描かれる。そこに予定調和としての生はない。

履き潰すバレエシューズを
本物の光の繭として胸に抱く
喪主になる訓練をしているような
夕暮れの校庭の棒立ち

彼女はどこへ向かうのだろう。描かれる世界には、ただ来るべき死までの時間がある。履き潰すバレエシューズを胸に抱くという行為は、あたりまえのようにこわれていく生を慈しんでいるのだろうか。作品のなかの喪主になる訓練をしているような棒立ちは、自身の死についての予行練習のようにも見える。

空の箬箱をしずしず持ち運ぶ
花びらよりも薄いからだで
真っ白な平均台を踏み外し
少し遠くに七月が咲く

今日もまた、彼女は花びらよりも薄いからで、空の箬箱を運ぶ。それは空箱であるほかない生を、美しいものと信じているからに他ならない。遠くの7月は、平均台

を踏み外したのちに、はじめて咲く。おそらく常田は、神なき時代にあつて、彼方の7月をめざす一頭の蝶なのだろう。

林桂

「大賞候補」川上 真央

*参考作品

- 1 すずらんのように
うなじを光らせて
眠るあなたがまぶしい始発
ざわめきを遠くに覚え
ぺんぎんのさみしさで行く
母校のろうか
野苺のかたちの
えくぼ持っていて
きみは
どこでも生き抜けそうだ
放課後の窓辺にすわり
惑星の心地で
すすめる未来のはなし
めぐすりの光まぶしく
すこしだけ
溺れてみたい春風がある

6 横顔のきれいな人
を想うとき

7 胸をさまよう土星のひかり
すり鉢に胡麻を

ろりろり鳴らしつつ
なべて童謡めく懐古談

8 クッキーの角までふくれ花明かり
こすれてはふくらむ

9 春の便箋に
ことばは小川の加速度をもつ

10 初夏の陽はすこししめって
さよならのあつた

別れのほうが少ない
鼻濁音うすく伸びゆくような朝

11 たまごは水の声でやぶれる
うたうとはうったえること

12 丹田に
ふるえつづける水鏡がある

13 星空のように瞳は
傷ついて

14 テディベアまだ
抱かれるかたち

夏霧にさらし
泣きあと糖衣めく

15 半夏生ざわざわ満ちる
日盛りの

16 人影にふとあやうい淀み
緑陰にわたしあるいは火の余裔

17 うちがわを
開かれて照るオムライス

18 泣きそうなままだったね君は
ルイボスティー香れるままの
くちびるで

少女の囁くようなフルート
こわされた一人称で

19 歩くとき
あなたに解けたままの靴紐

20 物言わずカフェが翳れば
人びとは
水仙のごと起きあがりゆく

*選評

川上真央氏を推す。短歌体を中心とした表現者である。言葉の根に作者の実感を残しつつ、レトリックを深める書き方で、よい意味での「青春短歌」と言える。甘やかな匂いを残しつつ、それに流されない抑制が効いている。比喻表現が卓抜だからである。

「野苺のかたちの／えくぼ」、「胸をさまよう土星のひかり」「童謡めく懐古談」

「たまごは水の声でやぶれる」「丹田に／
ふるえつづける水鏡」「デヴィエアまだ／
抱かれるかたち」「あなたに解けたままの
靴紐」のように印象的な輝く言葉が作品に
ちりばめられる。作者の言葉の感性のよさ
が伝わる。

多くの作品世界は「あなた」や「君」の
相聞の世界に閉じている。その世界で輝く
関係、言葉を紡ぐ。時に自画像めく「少女」
が現れる。また時にその世界を囲む「人々」
が現れる。背伸びしない小さな世界を描く
からこそ、その世界の輝きを映すことができ
ているとも言える。

初夏の陽はすこししめって

さよならのあった

別れのほうが少ない

「初夏の陽はすこししめって」に、感情、
感傷を隠しながら、幾つかの別れの季節を
総括する。別れの挨拶を交わしながら別れ
る方が別れ方としては希である。別れの挨
拶をするべき人で挨拶ができなかったこと
もあっただろうが、殊更別れの言葉を交わ
す程でもない関係の人々の中で生きている
ことに思い至る。その方が茫々たる寂寥感
をもたらず。広い世界のとば口に佇んでい
るのだ。多くの別れを経験して、別れのす
れっからしとなった私などには、失われた
感性だと気づかされる。この作品が作者の
中で優れたものかは問わないで、作者の作

品世界を支える感性として今は貴重だと指
摘したい。若いときにしか書けない世界が
ある。大切に書き留めて欲しい。

龍 秀美

「大賞候補」常田 瑛子

* 参考作品

- 1 出し過ぎて机の上に散らかした
ティッシュはくたばった鳥の群れ
- 2 除け者にされた獣の毛が詰まり
鍵が奥まで入らない星
- 3 傘立ては雨の靴下
居ない人の声を
思い出すところに履く
- 4 空だけが残されていて
抜け殻の割れ目は小さな光の滝
点滴が海に溢れて
- 5 一人乗り用の観覧車で眠ってる
さみしさと呼ばれるものの輪郭よ
- 6 空を鳥から奪うのは雨
空っぽを振りほどいたら夕焼けの
栓を抜かれてかえりたくなる
- 7 仰向けで海の起源を想うとき
眼裏で揺れている吊り革
- 8 ジュラ紀では地球語だった雨音を
飴玉を舐めながら聴く夜
文脈は線路を渡り花びらの
ような歯型がうつすら残る
蟻が列を乱すようなたてがみを
持つ向日葵は無害な獣
- 9 地球儀の破片を野良猫が踏んで
意味を犠牲にしただけの午後
ヒトという飛べない鳥を青空に
生き埋めにした名残が二月
水を飲む牡鹿のように文字を産む
万年筆は秋の静謐
〈まぼろし〉の
- 10 死因を知りたくて秋は
ゴッホの耳を持ち歩いてる
- 11 夏の屋上の正午は白蛇が
横切るような光の破裂
過去という蛇口の首にかけられた
固形石鹸は冬の名残
- 12 喪主になる訓練をしているような
夕暮れの校庭の棒立ち
- 13 空の箸箱をはずしず持ち運ぶ
花びらよりも薄いからだで
- 14 炭酸のように予感が吹きこぼれ
あさつての夕焼けを組み敷く
- 15
- 16
- 17
- 18
- 19
- 20

*選評

- 出し過ぎて机の上に散らかした
ティッシュはくたばった鳥の群れ
- 除け者にされた獣の毛が詰まり
鍵が奥まで入らない星
- 地球儀の破片を野良猫が踏んで
意味を犠牲にしただけの午後

常田瑛子さんの作品の特徴はその社会性にあると思われるが、肯定と否定が微妙に絡まり、行動を働きかける主体と、動かされる側とがいつの間にか入れ替わることよって奥行きを深くする。机の上に散乱した白いティッシュの有様は秩序を失った自然への批判と共に、それを招いた人類の一人である自分の在り方への考察でもある。ティッシュを出し過ぎたのは誰か。(自分で)くたばった鳥は自己責任なのか。

除け者にされた獣は人間の営みの結果だが、同じ獣の一員としての自分がいる。そして鍵を入れようとしているのは何物か。鍵によって開けるもの(可能性)があるのか。

(既に)バラバラになった地球の未来を踏んでいる野良猫は、何のためにそんなことをしているのか意味も分からない。取返しつかない「午後」。おそらく現在の地球上の誰にも意味は分からないのだ。

その結果、どこにも行くところの無い人間は

- ヒトという飛べない鳥を青空に
生き埋めにした名残が二月
- 空だけが残されていて
抜け殻の割れ目は小さな光の滝
- さみしさと呼ばれるものの輪郭よ
空を鳥から奪うのは雨
——ということになる。

一方、言葉が生き物であることをまざまざと教えてくれる美しい作品群がある。

- 文脈は線路を渡り花びらの
ような歯型がうつつら残る
- 空の箸箱をしずしず持ち運ぶ
花びらよりも薄いからだで
- 炭酸のように予感が吹きこぼれ
あさつての夕焼けを組み敷く
- 空っぽを振りほどいたら夕焼けの
栓を抜かれてかえりたくなる
- 水を飲む牡鹿のように文字を産む
万年筆は秋の静謐

花びら、歯型、箸箱、炭酸、夕焼け。どれも叙情的、官能的な単語だが、取り合わせられた物や、動詞によって動かされて微妙にずれ込むことで新鮮な光景を創る。

また、小さな者、遥かな物への視線も独特だ。

- 喪主になる訓練をしているような
夕暮れの校庭の棒立ち
- 点滴が海に溢れて
一人乗り用の観覧車で眠ってる
- 仰向けで海の起源を想うとき
眼裏で揺れている吊り革

やがて運命的に「喪主」になる人間の姿が見えている。それは「一人乗り用の観覧車」に乗る「未来を見るもの」としての作者の姿でもある。ひるがえって億年の太古を想うときも、侵入者として眼前にある謎としての「吊り革」。それは永遠の謎であり文学の目まいでもあるだろう。

短歌体に類がない厳しい批評を存分に盛り込みながら、同時に叙情がその表裏として支えになっている魅力的な世界は、口語詩句の一つの可能性を示しており、大賞に推したいと考えます。

第七回口語詩句賞

一次選考・奨励賞候補 ※参考作品は各選考者が選出

暮田 真名

「奨励賞候補」檜野 美果子

- 1 破魔矢落ちてる
 - 2 ベビーカー去ったあと
 - 3 个体差があります母も鯛焼も
 - 4 冬林檎切る
 - 5 フェイクニュースの熊きれい
 - 6 夏痩せて雲を一匹飼うつもり
 - 7 玉虫ずっと照らされながら鬱
 - 8 安産と繰り返す人缶ビール
 - 9 メルちゃんのミルク空っぽ夏座敷
 - 10 ボールプールに魂の二つ三つ
 - 11 花冷えのシートマスクに目鼻口
 - 12 春の三日月リカちゃんにピアス跡
- 「奨励賞候補」互井宇宙論
- 1 アンドロイド漱石ひとりでに滝へ
 - 2 権力うつくしいうつつ齧る柿っ!
 - 3 川柳はセーヌ川発祥 だけどね
 - 4 どうやって伝記にならず
- 生き延びよう

- 5 恒星に勝ってわたしが産まれたの
- 6 おいで血を金粉にしてあげるから
- 7 炎天をアリョーシヤの血の一滴

- 8 どう見ても横顔だけの演奏会
- 9 ちはちよつとちかそう
- 10 ちちとちちのちち
- 11 木耳を食べるフルート奏者たち

小島なお

「奨励賞候補」奥井 健太

- 1 凧の東京に知らない競技
- 2 ご飯を食べる相手が変わる秋の風
- 3 鯖雲に軍服の強い襟です
- 4 手話の手をそのまま繋ぐ炬燵です
- 5 噴水を大きく思う口の傷
- 6 短夜は映画の広いトイレです
- 7 母の日の縄跳になるフラフープ
- 8 春の風吹く手の平がまな板に
- 9 風船を割る間違ったやり方で

10 たんぼぼの事で裁かないで下さい

「奨励賞候補」快名

- 1 火に寄れば燠に安定してからの
 - 2 あなたへ一度敬語が混ざる
 - 3 蓮の花
 - 4 聴診器かしてください
 - 5 手をとってまた手をはなす／
 - 6 はなされた手がまた手をとる
 - 7 渚と呼んだ
 - 8 渚と呼んだ
 - 9 渚と呼んだ
 - 10 渚と呼んだ
- 解凍に葉物は透けて駄目になる
そのとめどない回想と似て
雪解けの川のひとつが
(借りていた本、返そうか)
合流をする
鳴り出せば減速し出すオルゴール
- あの冬きみは帰省をやめた
越境を終えた翼のようにして
青い器におくカトラリー
ドアを這う月あかり
見たことがある、
短編に脱走兵がいる

- 9 絶滅がこの先ずつとあるだろう
それでも辞書に語彙、隣り合う
- 10 会いたさが風ぐしばらくの、
洗う、干す、畳む、重ねる、
そうして積もる

杉本真維子

「奨励賞候補」高田皓輔

- 1 菜箸の長さのように眠ったら
もう片方を探さなければ
- 2 天気雨とうれし泣きが似てるのを
あなたが話してわたしが笑う
- 3 あやしつつ
やるしかないね毎日は、
花が如雨露にさせるみたいに
- 4 ピーチティーふざけるのを
いい加減にする
- 5 ドラマーにドラムの才能 蛇に骨
吹き替えのような水辺にふる小雨
- 7 似たような店の並びを行きながら
この雪は雪のまま強くなる
- 8 いちめんの
やさしさだった菜の
花の

- 9 花畑の菜の
花を食べてる
- 9 電線のたわみのいつか収まって
それから鳥がまた来るかもね
- 10 漂着に似た起き抜けの昼すぎの
洗顔までを手繰りよせれば

「奨励賞候補」石村 まい

- 1 あこがれは
へびつかい座の手に落ちて
ときおり戦わせるカトラリー
- 2 なんだろう
鎧をつけてしまったの
鯺鮓をそう読めるのと同じ
- 3 しつとりとあまいあぶらを
垂らしつつ
茎は鉄によく抗う
- 4 ワンピース脱ぎ捨てるとき
いきものの
骨格あらわなる一人部屋
- 5 ため息を縫いとめて夜、
隣憫は
百合のこどもとなってふくらむ
- 6 かるがると
運び込まれる月や椅子
そういう失いかたを
何度も

- 7 鳥のみる夢にかならず降っている
光の雨の名前を知らず
- 8 白ぶどうの部屋が一室あいている
岬のように夜をねむれば
- 9 爪切りがえんえんと吐く細い月
ゆびをみるだけで
- 10 なみだがでてくるの
ナンをちぎれるゆびであるのに

高橋修宏

「奨励賞候補」石村 まい

- 1 秋と数字の媒体として立ちつくす
古本市に消えそうなひと
- 2 うつとりと躑躅に迫る
夕闇へ
音なくいれかわる双生児
- 3 かき氷くずしてゆけば
夕闇に
こどもの増える
- 4 甘いみずうみ
月は檻
うまれなかったアルビノの
- 5 けものを一羽のこらず抱いて
鱗粉をくぐった指はもどらない
わたしの夢へ泣きにくる人

6 生まれた日のあなたに
金糸をめぐらせて

世界はすこし霞むのでした

7 鳥のみる夢にかならず降っている

光の雨の名前を知らず

8 ことごとく雲逃げてゆき

晴天は

文字を抜かれた遺書に似ていた

9 貝のうちに真珠ふくらむ春の日の

どうしようもなくきいろい眠気

10 はずせない画鋸ばかりに

照らされて

教室はときに夢の監獄

「奨励賞候補」鶯浦 るか

1 「じょーきょーする」

柳葉魚を齧ってふという子

2 ら・フランスひらがな熟す香冷く

鉢割れのざくろは燃えて踊る納屋

4 全天に星の滴る銀河は漏斗

澤瀉はみんなさんかく田圃に死角

6 地球がらす透かしてひずむ晝の月

光遊ぶおはじきの溝の谷あい

8 いきしにの番号売りやまかがし

ほたる燈まけるせんそう手に灯す

10 んめ、んまと父はいつてた梅と馬

立花開

「奨励賞候補」ムクロジ

1 年明けて

McDonald's の D を拭く

2 肉まんを割って

呼び捨ての屋上

3 ところてんになりたてのもの

濡れている

4 けんかした手が天牛に触れている

5 髪洗う懐かしい宇宙のにおい

6 花陰にカレーは飯をまわりこむ

7 ぬかるみの日は

ぶらんこがすれ違ふ

8 死ぬ時は家と言う人雪柳

9 泣くための時間が少し要る二月

10 レシートをまつすぐ折って花曇

「奨励賞候補」にわ

1 へなちよこは食べられますよ、

よく噛んで

2 なんかよう

なんかようかい

なんだよう

わたしなんかと

うたうようかい

にわたりのたましいはどこに

いくのかな

チキンバーレル、小さな棺

並べると

背骨にみえるマシユマロを

焼いて溶かしてうまれるけもの

陰毛を削いで鍾乳洞の夏

このような

カーブを人は曲がれずに

田んぼに刺さっていくんだね、夜

ストローをさします

夢のさかいめに

さあさあはやく吸った吸ったア

かなしみは冷凍保存

もうすこし

げんきなときによく煮てたべる

そっけないやきそばがすき

具がなくて

麺とソースがただそこにある

しばしばと

雪のかけらがとけてゆく

フロントガラスはことりの温度

西躰かずよし

「奨励賞候補」大西 美優

- 1 わる口を言うときのこえ冬かもめ
- 2 はつなつの性別欄に粹いくつ
- 3 すべりひゆ悲しい音のする楽器
- 4 ぼんにゆいと言えば夏木になる獣
- 5 ばいなっふる抱いて
- 6 地下鉄
- 7 すこし泣く
- 8 整列のマカロン
- 9 遠い国の夏
- 10 秋の宵
- 11 パセリぽぽぽと散らばせて
- 12 ピルのアラーム
- 13 秋気は頬にぬるすぎて
- 14 スプーンの音まるやかに文化の日
- 15 フェミニストです、そして
- 16 黙るほどの
- 17 雪

「奨励賞候補」小川 未夜子

- 1 宝石と時計の並ぶ店先で
- 2 雪に似ている小銭を払う

2 シーツから獣のにおい

母親はわたしと

縁を切りたいという

3 役という棺に入り眠るのを

演技と呼んでおやすみなさい

4 この世よりうつくしい場所

知らなくて

5 グレープフルーツ横に切る夜

進学もわがままだったと

いまわかる

6 百均のブレスレットがきれい

父が好き

7 という理由で嫌ってた

丸亀製麺に寄っていく

海を臨む小学校の

ささやかな

8 わたしはいつも満腹だった

殺されないかぎり

9 生きているという

人を見つけて森だと思

祈りとかなくていいなら

暗がりに

10 夜と名づける仕事があった

薫風の丘であなたはリトマス紙

笑ったり黙ったりしてほしい

林桂

「奨励賞候補」ムクロジ

- 1 石段に合わせる歩幅つくづくし
- 2 花冷の糸に重たいティーバッグ
- 3 三月の醤油をはじく目玉焼
- 4 にわたりのあしのつちいろ鼓草
- 5 花陰にカレーは飯をまわりこむ
- 6 短夜の本におさまる菜紐
- 7 梅雨明けて手前の卵から使う
- 8 秋の蟬靴箱に靴深く入れ
- 9 しゃっくりがおさまったので
- 10 帰ります
- 11 空っ風信号全部青になれ

「奨励賞候補」石村 まい

- 1 はずせない画鋏ばかりに
- 2 照らされて
- 3 教室はときに夢の監獄
- 4 貝のうちに真珠ふくらむ春の日の
- 5 どうしようもなくきいろい眠気
- 6 あたらしいことは
- 7 いつでもこわいから
- 8 これも
- 9 くさかんむりのかみなり

4 瘦身のあなたと夢にすれ違う
祈りのように日傘を抱いて
5 飛ぶときに

耳のうしろを鳴る風よ
町いちめんに咲いている何か

6 鳥のみる夢にかならず降っている
光の雨の名前を知らず

7 ひとりでは取りにいけない
鍵のこと

8 夜明けの桃の傷の甘さに
あやまちはあやまちのまま

花柘榴
みるみる象の舌をあふれて

9 鱗粉をくぐった指はもどらない
わたしの夢へ泣きにくる人

10 心拍を枕のうらに聞きながら
夢の羽化まで遠いくらやみ

3 今ならまだ諦められる
最後まで使わなかった
ペンの細い側

4 梅雨明けて手前の卵から使う
5 花陰にカレーは飯をまわりこむ

6 三月のくしゃみの前の
一瞬の裏声のような
人になりたい

7 いつか君が示準化石になるときに

撒くね水風船の破片を

8 自転車で踏んで蛇かもしれない

9 レシートをまっすぐ折って花曇

10 ふの口のため息をつくとき時雨

「奨励賞候補」にわ

1 にわとりを

だきしめたことのあるふくを

ぜんぶみえないところにしてしまう

2 へなちよこは食べられますよ、

よく噛んで

3 存在を赦されたいと思う日の

棒のアイスにでてくるアタリ

4 ニンゲンの

かわをかぶってみたものの

中身がはみ出てわらうモノノケ

5 にんげんが泣くのに三十一音で
じゅうぶんなのだテトラポッドよ
6 このような

カーブを人は曲がれずに

田んぼに刺さっていくんだね、夜
腹痛を数える単位はぎゅるりです

7 今日は2ぎゅるり数えています

8 父さんは職人さんだ腕のいい

大っ嫌いだだいつきらいだ

9 音という文字は香水瓶に似て

ひと吹きすれば淡く香った

10 いらっしやい

ここはなんにもないや館

なんにもないの感じあります

龍 秀美

「奨励賞候補」ムクロジ

1 年の瀬の菩薩が雲に立っている

2 噴水の水まとまって上がりゆき、

ひらく

拍手は飛沫のように